

日本人の国際交流活動への参加の契機と活動持続の要因

— 国際交流活動の新しい枠組み構築を目指して —

Opportunities to participate in international exchange activities and factors that cause international exchange activities to continue

— Intending to establish a new framework for international exchange activities —

経営学部現代経営学科

田村 綾子

TAMURA, Ayako

Department of Contemporary Business

Faculty of Business Administration

岡山大学全学教育・学生支援機構

長野 真澄

NAGANO, Masumi

Institute for Education and Student Services,

Okayama University

秋田大学高等教育グローバルセンター

市嶋 典子

ICHISHIMA, Noriko

Global Center for Higher Education

Akita University

国際・教養教育センター

大平真紀子

OHIRA, Makiko

Center for International

and Liberal Arts Education

筑波大学人文社会系

関崎 博紀

SEKIZAKI, Hironori

Faculty of Humanities and Social Sciences,

University of Tsukuba

要旨：本研究は、国際交流活動の新しい枠組み構築を目指し、①国際交流活動を始めるきっかけ、②国際交流活動を継続させる要因、③地域の国際交流イベントとの関係を明らかにすることを目的とし、国際交流活動を長年続けている地域住民2名に対して半構造化されたインタビューを行った。得られたデータは質的分析法SCAT (Steps for Coding and Theorization) の手法を用いて分析した。その結果、①異文化を持つ人との出会いが国際交流活動参加のきっかけとなり得、また、のちの行動に繋がる信念ともなり得ること、②国際交流活動の中で感じる喜びや満足感が国際交流活動継続の力となることが明らかになった。国際交流においては、子供、または家族や近い人とともに参加できるように参加形態を工夫することが必要であるとの示唆も得た。

Abstract : In this study, we conducted semi-structured interviews with two Japanese citizens who have been conducting international exchange activities for many years, intending to establish a new framework for international exchange activities. This study also aimed to clarify the following points: (1) opportunities to participate in international exchange activities, (2) factors that cause international exchange activities to continue, and (3) relationship between international exchange activities and regional international exchange events. The obtained data were analyzed using the qualitative analysis method, SCAT (Steps for Coding and Theorization). Results showed that (1) encounters with people with different cultural backgrounds can be an opportunity to participate in international exchange activities, forming beliefs that lead to future action. (2) The joy and satisfaction felt during

international exchange activities can be a force for continuing international exchange activities. Notably, activities involving family members could lead to continuing international exchange activities, and it was found that this point should be considered in international exchange events.

キーワード：国際交流，SCAT，国際交流の契機，国際交流の継続，国際交流イベント

1. 研究の背景

近年，多文化共生社会の実現に向け，様々な取り組みがなされている。総務省は2020年9月にこれまでの多文化共生推進プランを改訂し，「地域における多文化推進プラン（改定）」¹⁾を発表した。これは，2018年12月に閣議決定された「外国人材の受け入れ・共生のための総合的対応策（以下，総合的対応策）」²⁾を受けたものである。

この総合的対応策は，外国人材を適正に受け入れ，共生社会の実現を図ることにより，日本人と外国人が安心して安全に暮らせる社会の実現に寄与することを目的としており，①外国人との共生社会に向けた意見聴取・啓蒙活動等，②生活者としての外国人に対する生活支援，③外国人材の適正・円滑な受け入れの促進に向けた取り組み，④新たな在留管理体制の構築の4つのパートに分けられている。外国人が日本人と同様の公共サービスが受けられる環境を整えるものであり，社会情勢の変化に応じて柔軟に変更される。「地域における多文化推進プラン（改定）」は，この総合的対応策を受け，外国人が安心して日本で生活できるように，また，外国人を受け入れることで日本が多文化共生社会となり，地域社会がより発展することを目指している。

一方，多文化共生には，「言葉の壁」，「心の壁」，「法の壁」³⁾が存在することが知られている。この3つの壁は，日本への居住を望む「外国人側」から述べられたものであるが，受け入れる日本人側から見ても同様の「壁」が存在する。「地域における多文化推進プラン（改定）」や総合的対応策を検討すると，どちらも「言葉の壁」，「法の壁」については対策が取られているが，「心の壁」についての対応は十分であるとは言えないようである。「心の壁」は，異なる文化を持つ者に対する差別や偏見によって形成される。政策や法律が整備されても，外国人の社会参加に対する「心の壁」があれば，多文化共生社会は実現しない。

そんな中，地域社会には，異なる文化を持つ者と自ら積極的に関わりを持ち続け，「心の壁」を感じさせない地域住民も確かに存在する。彼らがそうした関わりを持ち始めたきっかけや，関わりを継続する原動力

は何であろうか。本研究では，2名の地域住民の事例を取り上げ，いかに「心の壁」を乗り越えて，異なる文化を持つ者と関わるようになり，その関わりを継続するようになったかを探る。

2. 先行研究の概観と本研究の目的

多文化共生社会の実現のためには，その障害となる3つの壁，特に「心の壁」を解消する必要がある。そのためには，実際に異なる文化を持つ者との交流を可能にする国際交流活動や異文化理解講座等が有効である。

国際交流活動の中には，近年，市町村等で大々的に開催される国際交流イベントがある。これは，地域に暮らす，日本人住民と外国人住民の交流の場として開催されているが，いわゆる3F（Fashion, Festival, Food）と言われる，参加しやすいものの，一過性のお祭りのようなイベントも多く，深い交流，あるいは日常的生活の中での交流に繋がるかは疑問である⁴⁾。そのため，異文化理解や継続的な交流に繋がる枠組みが求められるが，そもそも異文化に対する継続的な関心を支える要因が何かについては，管見の限り明らかになっていない。

また，異文化理解講座については，文化相対主義に則った教養としての異文化理解教育，すなわち知識からなる「認知的側面」に重点が置かれ，国際交流に対しての「行動的側面」や，認知的側面と行動的側面をつなぐ「感情的側面」に対する教育活動が不十分であると指摘されている⁵⁾。学校教育での国際理解教育においても同様の問題があり，その問題を解消するための教育実践も行われている⁶⁾が，普及しているとは言えない。

そこで，本研究では，国際交流活動を長年続けている地域住民を調査対象とし，インタビューを行うことにより，以下の点を明らかにする。そして，その結果を異文化理解のための国際交流活動の新しい枠組み構築の一助とすることを目指す。

- ①国際交流活動に踏み出すことになったきっかけ
- ②国際交流活動の継続を促す要因
- ③地域の国際交流イベントとの関わり

3. 研究の方法

長年、継続的に国際交流活動に関わっている地域住民2名を対象とし、半構造化されたインタビューを個別に行い、SCAT⁷⁾の手法で分析し、検討を行った。

3.1. 調査対象

調査対象としたのは、20年以上国際交流団体のまとめ役として活動を続けている2名の地域住民である。この2名は、各々の国際交流団体に属しながら、イベントCという地域の国際交流イベントの実行委員としても活動している。この2名の国際交流活動参加のきっかけ、および活動継続は、生育環境や成人してからの生活環境によるものではなく、活動参加により報酬を得るためでもない。あくまで本人の意思によるものである。この点と、国際交流活動への主体的な関与、その継続年数を鑑み、この2名を調査対象とした。

表1は、調査対象の状況をまとめたものである。

調査対象であるA、Bが実行委員を務めるイベントCは、両者が居住するC市の国際交流イベントである。主催はイベントC実行委員会であり、C市の国際課が事務局を務めている。30年以上続く国際交流イベントであり、C市の国際交流団体が多数参加している。イベント当日は毎回7,000~10,000人が会場に集まり、市内の国際交流団体が出したブースで活動内容の発表や展示を見る、ワークショップに参加する、市内の団体のパフォーマンスや世界の料理の屋台を楽しむ等の活動が体験できる。

イベントが開催されるのは1日のみであるが、実行委員は、イベントCの企画、運営、参加する市内の国際交流団体の調整や連絡、イベントの広報などの準備で、年間を通じてイベントに関係する作業を行わなければならない。AとBは、当初、所属団体の一員としてイベントCに参加していたが、のちに実行委員となっている。

3.2. 調査方法

調査対象となる、A、Bには、それぞれ対面で30分ほどのインタビューを行い、それをボイスレコーダーに録音し、そのすべてを文字化した。

インタビューでは「国際交流に関わったきっかけ」、「自身が携わっている国際交流活動」、「イベントCとの関わり」のそれぞれについて質問し、A、Bには、その質問について自由に語ってもらった。そして、必要に応じて、追加で質問を行った。

3.3. 分析方法

データはSCATの方法に則り、分析を行った。詳細な手順や決まり事については大谷(2019)を参照されたいが、ここでは以下の分析結果をどのように導いたかを理解するのに必要と思われる情報を示す。

SCATでは、8列のマトリクスを用意する(表2参照)。一番左の列に番号を書き、次に発話者名、3列目に、インタビューデータを文字化したテキストを内容によって切片化したものを書き入れていく。4列目に①「テキスト中の注目すべき語句」をテキスト中から拾って書き込み、5列目に①を言い換えた言葉を

表1 調査対象の状況

	A	B
性別	女性	女性
年齢	60代前半	60代前半
国際交流活動歴	25年	21年
所属団体	国際交流団体D ・複数の言語を同時に自然習得することを目的とした団体	国際交流団体E ・友好都市Eとの市民レベルの交流を推進することを目的とした団体
所属団体での活動	・多言語教育の後援会主催 ・支部内の多言語イベントの主催 ・勉強会 ・ホームステイ受け入れ ・交換留学生の送り出し、受け入れ	・友好都市Eへ日本文化紹介ができる物資を送る ・友好都市Eからの市民団体の受け入れ ・友好都市Eを市民に紹介する活動
所属団体での役職	団体Dの支部長	団体Eの副会長 団体Eの立ち上げメンバーの一人
イベントCとの関係	・実行委員 ・インタビュー時は実行委員長	・実行委員 ・インタビュー後実行委員長となる
個人的な活動	・地域の国際交流委員 ・留学生支援	・ALT(ネイティブの外国語指導助手)の支援

表2 SCATを用いて分析した本研究のデータ例

番号	発話者	テキスト	テキストの注目すべき語句	語句の言い換え	左を説明するようなテキスト外の概念	テーマ、構成概念	疑問・課題
5B		<p>それまでは外国の人、何かこう、選けるというか、そんな感じだったんだけど、でも子供、あの保育園にドイツの人が遊びに来たって帰ってきて、ドイツ語なんか聞いたこともないのに遊べるのっていいから、なー普通に遊んだよとかかって言うから、でその後私怖くなかったって聞いたんです、本当にね、外国の人が多いですってでもなんか憧れはあった、ずっと、なんか外国に対する憧れはずっとあったんだけど実際に目の前に来られたらちょっと困るよなって言うという思いだったのに子供達は何か言葉もわからんけどなんか楽しく遊んで帰ってきたっていうのを聞いて、へ〜で思って、でその保育園のフェンスにそのヒッポのねチラシがあったりして、何回か行ってたんですよ、何回か行ってたけど、とっては行かずとっては行かずだったんですけど、子供がそういう体験をしたのをきっかけに、今度こそじゃあ講演会に行ってみようと思ってみたらそういう、大人も子供に返って返ってみたいないなことを言われたので、何か単純に楽しそうだなって思うので入った</p>	<p>怖くなかった 外国の人いいです 外国に対する憧れ 目の前に来られたらちょっと困る 言葉もわからんけどなんか楽しく遊んで帰ってきたっていうのを聞いて、へ〜で思って、でその保育園のフェンスにそのヒッポのねチラシがあったりして、何回か行ってたんですよ、何回か行ってたけど、とっては行かずとっては行かずだったんですけど、子供がそういう体験をしたのをきっかけに、今度こそじゃあ講演会に行ってみようと思ってみたらそういう、大人も子供に返って返ってみたいないなことを言われたので、何か単純に楽しそうだなって思うので入った</p>	<p>恐れ 外国人から距離をとる 外国への憧れ 子供の体験 楽しそうな子供 興味を持ちながらできな かったことを始める</p>	<p>外国人・異文化という未知なものへの恐れと期待 言語が必須ではない我が子の交流体験 踏み出すきっかけ</p>	<p>外国人への憧景 言葉ができないために外国人と通じ合えないことへの畏怖 交流には言語が必須という思い込みを壊す体験 一步踏み出すきっかけ</p>	<p>ヒッポの理論とずれていないのか。個人的に興味があるところだけを取り入れている。</p>

Aさんのストーリーライン

インタビュイーの現在の所属団体に関与は多言語運用への関心や外国人への憧景から始まっている。しかし、インタビュイーは言葉ができないために外国人と通じ合えないことへの畏怖を持っており、国際交流に踏み出せないでいた。しかし、交流には言語が必須という思い込みを壊す体験を我が子がしたことで一步踏み出すきっかけに同団体の講演会に出席し、言語の自然習得への期待を持って、入会を決めた。(略)

Aさんの理論記述

①国際交流活動参加の契機

言葉ができないために外国人と通じ合えないことへの畏怖を持っている人でも、交流には言語が必須という思い込みを壊す体験が国際交流に一步踏み出すきっかけになり得る。(略)

②「テキスト中の語句の言いかえ」として書き込む。6列目には③「②を説明するようなテキスト外の概念」、7列目にはテキストの前後や文全体の文脈を考慮した④「テーマ・構成概念」を書き込む。8列目にはさらに追及すべき点⑤「疑問・課題」を書き込む。テキストは、①→②→③→④と書いていくにしたがって、脱文脈化される。

次に、④「テーマ・構成概念」を、書かれた言葉の関係性を考慮しながら、「ストーリー・ライン」にまとめる。ストーリー・ラインは、「テーマ・構成概念」に抽出した言葉すべてを使わなければならない。ストーリー・ラインには、①～④の分析を進めることで、脱文脈化されたデータが、再文脈化され、インタビューでは見えなかった「何が起きているか」が綴られる。最後に、ストーリー・ラインを一般化した「理論記述」を行う。

本研究では、テキストを筆者全員が個々に分析し、データセッションを行いながら、分析の客観性を確保するよう努めた。その結果のうち、以下では、理論記述と、それを導く前段階にあるストーリー・ラインを中心に示す。また、得られた2名分の分析結果について、単純には比較できないことを理解した上で異同に言及し、国際交流活動の枠組み構築に対する示唆を得る。

3.4. 倫理的配慮について

調査対象であるインタビューイに対しては、事前に研究の目的、内容を説明し、了承を得た。また、①インタビューイの匿名性を守ること、②インタビューイでは同意した内容だけ話し、インタビュー終了後、撤回したい内容があった場合はデータを公表しないこと、③インタビューイの同意なしには、データを使用しないこと、④インタビューイのデータは研究以外には使用しないこと、⑤その他、人権に十分配慮することを口頭と書面で説明した上で、同意を得た。

4. SCATによる分析結果

4.1. Aの分析

4.1.1. Aのストーリー・ライン

Aのストーリー・ラインを表3にまとめた。なお、下線がひかれた語句は、SCATの分析によって得られた「テーマ・構成概念」である。

Aが国際交流活動を始めたのは、国際交流団体Dに所属してからである。それまでは、外国に憧れながらも、言葉が通じないことで外国人を恐れ、接触を拒否していた。しかし、自身の子供の交流体験がきっかけとなり、国際交流団体Dに所属、活動を始める。

Aは国際交流活動を続ける中で、次第に「相手の母

表3 Aのストーリー・ライン

Aの現在の所属団体に関与は多言語運用への関心から始まっている。Aはもともと外国人への憧憬を持っていたが、言葉ができなければ通じ合えないという思い込みから起因する外国人への畏怖を抱いており、国際交流に踏み出せないでいた。しかし、交流には言語が必須という思い込みを壊す体験を我が子がしたことによって一歩踏み出すきっかけとして同団体の講演会に出席し、言語の自然習得への期待を持って、入会を決めた。

Aは同団体の関係でイベントCに参加し、外国人市民の存在を発見した。その経験や同団体の活動から外国人に対する心理的な変化や外国語の中での英語の相対化とともに相手を尊重する手段としての相手の母語の使用の大切さに気づき、外国語が完璧に話せなくてもいいという認識の転換が起きた。相手の喜びを感じることによる自身の喜びを知るようになり、それがAの活動継続への動機づけとなり、ライフワークへの昇格につながった。

Aは日常的な外国語との接触がある環境を保持する中で、わが子のコミュニケーションに対する態度の変化を感じるとともに、Aの中で外国人と交流する上での言葉の重要性の相対化が起きた。同時に、外国語を話さない家族の存在から相手を受け入れようとする態度の重要性に気づいている。その態度の中には、他者の警戒心を解くメッセージが含まれており、その態度を示すことで、言葉を介さないコミュニケーション成立による満足感が得られ、国際交流はこうあるべきという思い込みからの脱却につながった。

Aは、イベントCの実行委員会参加の契機が所属団体の責任者としての受動的な実行委員就任であるとしている。実行委員就任によって変化した関わり方に対しては、イベント継続のためのまとめ役としての義務感と重要度の認識を持ちつつも、一般参加者と同じ目線で関わりたい気持ちを持っている。イベントの中で見出した新しい自身の活動意義やイベントブースに参加した子供の様子から感じた、新しい活動意義を見出しつつも、国際交流の当事者の立場への回帰願望を捨てられないでいる。

語を使うことで相手を喜ばせることができる」ことに気づき、喜びを感じるようになる。その喜びが活動継続の動機づけとなり、国際交流活動がAのライフワークになる。

Aの国際交流活動は、家族を巻き込みながら、次第にAの生活や国際交流活動に対する考え方も変え、「国際交流はこうあるべき」という思い込みから脱却する。

Aは、所属団体DがイベントCに参加していることから、イベントCに参加することになった。その後、所属団体Dの支部長となったことで、イベントCの実行委員となった。実行委員の仕事の必要性は認識し、イベントCでの自身の所属団体の活動に意義を見出しつつも、イベントCに対しては義務感が強く、元の一参加者に戻りたいという希望を持っている。

4.1.2. Aの理論記述

ストーリー・ラインから以下の理論記述をまとめた。下線の言葉は、「テーマ・構成概念」である。

1) 国際交流活動参加のきっかけ

言葉ができなければ通じ合えないという思い込みに起因する外国人への畏怖を抱いている人でも、交流には言語が必須という思い込みを壊す体験が国際交流に一步踏み出すきっかけになり得る。

2) 国際交流が参加者に与える影響

国際交流活動に参加すると、外国人に対する心理的な変化や外国語の中での英語の相対化とともに相手に尊重する手段としての相手の母語の使用の大切さに気づき、国際交流活動時に外国語が完璧に話せなくてもいいという認識の転換が起きることがある。

3) 国際交流を継続させる原動力

相手の喜びを感じることによる自身の喜びが活動継続への動機づけとなる。それがライフワークへの昇格に繋がることもある。

4) イベントCとの関わり

団体の責任者としての受動的な実行委員就任からくる義務感により、一般参加者と同じ目線で関わりたい気持ちと国際交流の当事者の立場への回帰願望を抱く場合がある。

4.2. Bの分析

4.2.1. Bのストーリー・ライン

Bのストーリー・ラインを表4にまとめた。表3と同様に、下線部の言葉は、「テーマ・構成概念」である。

Bの国際交流活動に携わるきっかけは、大学時代のヨーロッパ旅行先での、他者から受けた拒絶やそれとは逆の友好的な態度で接してもらえた体験である。特

表4 Bのストーリー・ライン

Bが、現在の活動の基盤となる考えを持つようになったきっかけは、大学時代に偶然参加したヨーロッパ旅行だという。当初、旅行先のヨーロッパの人々に対する虚勢を張っていたBは、外国で拒絶されたことによる不安感を持った。この不安の中で外国人に助けられた経験は、初めての海外で受けた親切で温かいもてなしとそれに対する感激と、異なる文化を持つ他者への親近感をもたらし、実体験から見識を広めるという方法の重要性を強く認識させた。同時に異なる文化を持つ他者と友好関係を築くことの重要性を感じたという。自身の体験から、実際に見ることで世界を知ってほしいという自身の子供への願いや自身の子供の国際感覚育成への期待を持つようになった。

Bの所属団体とその活動を聞いたところ、友好都市間の市民レベルの交流を促進する団体で、交流相手の資金確保のための販売用物資の送付、市民受け入れなどの所属団体の活動について話してくれた。この団体を立ち上げたきっかけは、友好都市に派遣されるグループのメンバーに選ばれたことだという。友好都市に派遣され、そこで見た強く印象に残った交流相手の国際交流への取り組みと、相手に対して感じた感銘が団体創設の経緯に繋がった。

Bの所属団体の創設前のイベントCでの役割は、参加する同僚のサポート役にすぎなかったが、団体立ち上げ後はイベントCの実行委員になっている。その当時は、市主体の活動形態であり、実行委員への軽微な負担は不十分なイベントへの関わり方も許容していた。しかし、現在、Bは実行委員主体になったことによる負担増加を実感している。

Bは、高齢化という国際交流団体の問題と若者に所属団体の活動を引き継いで行かねばならないという課題を語り、それが解決できないのは、現在の自分の興味や利益を優先する風潮に原因があるのではないかと語った。

に、強い拒絶を味わった後に受けた親切は、Bの価値観を大きく変えた。その経験によって、Bは、実体験から見識を広めるという方法の有効性を認識し、友好関係を築くことの重要性を強く感じた。その後、Bは、自身の子供に対して実際に見ることで世界を知ってほしいという強い願いを持つようになる。

Bの国際交流への関わり方は、当初、外国人の同僚のサポート役に過ぎなかったが、友好都市Eへ派遣されたことで、Bの行動の指針が決まる。Bは友好都市Eで体験した国際交流の方法を自身の居住するC市で行いたいと考え、国際交流団体Eを立ち上げ、現在の活動に至っている。Bは自身の活動だけでなく、多くの国際交流団体の今後について考え、案じるようになった。

Bは国際交流団体Eを立ち上げてから、イベントCの実行委員となった。実行委員の在り方が変化する中で、最近の実行委員の仕事には負担を感じている。

4.2.2. Bの理論記述

ストーリー・ラインから、以下の理論記述をまとめた。下線の言葉は、「テーマ・構成概念」である。

1) 国際交流活動参加のきっかけ

外国で拒絶されたことによる不安感と不安の中で外国人に助けられた経験が国際交流に興味を持つきっかけとなることがある。

初めての海外で受けた親切で温かいもてなしとそれに対する感激、異なる文化を持つ他者への親近感、実体験から見識を広めるという方法の有効性に気付かせ、異なる文化を持つ他者と友好関係を築くことの重要性への認識をもたらす場合がある。

2) 国際交流活動への原動力

海外で他者から受けた拒絶や親切などの体験は実際に見ることで世界を知ってほしいという自身の子供への願いや自身の子供の国際感覚育成への期待に繋がりが得る。

他国で目にし、強く印象に残った交流相手の国際交流への取り組みや相手に対して感じた感銘が団体創設の経緯に繋がることがある。

3) イベントCとの関わり

地方自治体の国際交流イベントの実行委員は、運営が実行委員主体になったことによる負担増加に悩み、かつての市主体の活動形態での実行委員の軽微な負担を望ましく思う場合がある。

4) 地方の国際交流団体の現状

地方の国際交流団体は、高齢化という国際交流団体の問題と若者に所属団体の活動を引き継いでいかねばならないという課題を抱えている。

5. 考察

5.1. インタビューの分析

1) 国際交流に踏み出すことになったきっかけ

Aの国際交流活動参加へのきっかけは、言葉が違うために交流ができないのではないかと不安、恐怖を「躊躇していた原因の反証となる体験」によって、乗り越えた例と言える（表5参照）。

そして、今回の「反証となる体験」は、「自身の子供の交流体験」であった。このように、自身の子供、家族、身近な存在の体験は、「言葉の壁」、「心の壁」を乗り越え、国際交流に参加するきっかけとなる可能性があると言える。

一方、Bの場合は、国際交流を始めるきっかけが「旅行での体験」という個人的な経験であった。Bは、海外で言葉が分からないだけではなく、日本人であることで相手に拒絶されるという体験をした。そこには、「言葉の壁」、「心の壁」があり、Bは大きな不安の中にいた。その中で日本留学の経験者に出会い、助けられ、親交を結ぶという体験をした。この体験はBに強い印象を残すとともに、「実体験から見識を広めるという方法の有効性に気づかせ、友好関係を築くこ

表5 Aのインタビュー・テキスト①

それまでは外国の人〔を〕、何かこう、避けるというか、そんな感じだったんだけど、でも子供〔が〕、「保育園にドイツの人が遊びに来た」って〔言って〕帰ってきて、「ドイツ語なんか聞いたこともないのに遊べるの」って言ったら、「えー普通に遊んだよ」とかって言うから、で、その後、私、「怖くなかった？」って聞いたんです、本当にね。外国の人〔は〕いいですって、でもなんか憧れはあった。ずっと、なんか外国に対する憧れはずっとあったんだけど、実際に目の前に来られたらちょっと困るよなーっていう思いだったのに子供達は何か言葉もわからんけど、なんか楽しく遊んで帰ってきたっていうのを聞いて、へ〜て思っ

※〔 〕内は筆者による（以下のテキスト引用時も同様）。

表6 Bのインタビュー・テキスト

〔フランスで出会った日本留学経験者のもてなしが〕温かかったというか、なんていうのかな、あの、外国の人っていうのも私にとっても珍しい、初めての海外だったし、あつこんな風に、あのなんていうのかな、たったこれだけの出会いで、こちらがお世話にしたわけじゃなくて、お世話してもらって、さらにそうしてくれるっていうのがね、ああ、なんていうのかこう、近いっていうんか、世界ってね、広いけど、近いって、人はやっぱり一緒なんだなっていうのを感じてね。(略)行ってみてわかったんです。ほんとに親しくしてくれる人、あるいはやっぱ、拒否されてるなっていうのが、肌で感じたりして。だからね、なおさらベトナムの〔日本留学経験者の〕人がね、あんなふうに接してくれてね、すごく助けられたし、あのやっぱり仲良くするって大事だし、日本を知ってもらいたいとも思ったんですよ。

との重要性への認識」を与えた。そして、これがBの信念とも言えるものになり、Bが国際交流活動へ向かうきっかけとなった(表6参照)。

Bが国際交流に目を向け、活動を始めようと考えたきっかけは、このヨーロッパでの体験であるが、この体験は、家庭を持った後、自身の子供に対して「実際に見ることで世界を知ってほしいという自身の子供への願いや自身の子供の国際感覚育成への期待」を持つことに繋がり、それは、E市での体験とともにBの交流活動継続の原動力にもなっている。

このようにAもBも共に家族あるいは他者との関わりの中で、異文化に対する不安が打ち消された経験を持つ。この経験は、AとB、それぞれの異文化に対する態度に大きく影響し、共に価値観の変化をもたらし、その後の行動も変化させている。

2) 国際交流活動の継続を促す要因

Aの国際交流活動を継続させる原動力になっているものは、「相手の喜びを感じることによる自身の喜び」であった。

Aのインタビューでは、交流相手とのふれあいの中で、相手との心理的距離が縮まり、「相手の喜び」が活動継続の糧となり、当初は交流が本当にできるのかと疑いつつ参加していた国際交流活動がライフワークに昇格するに至るまでの経緯が語られている。その過程で、国際交流活動の一部が日常生活の中に組み込まれ、家族をも巻き込みつつ、A自身の生活スタイルにも変化をもたらした(表7参照)。

Bの場合は、国際交流を始めるきっかけとなったヨーロッパでの出来事がBのその後の行動を決定づけたと考えられる。Bは友好都市Eでの市民間交流を体験し、国際交流団体を立ち上げた。それは友好都市Eで体験した「強く印象に残った交流相手の国際交流への取り組みや相手に対して感じた感銘」から起こした行動であるが、その行動に至った発端は最初のヨー

ロッパでの体験であり、自身の子供に願った「世界を知ること」、「国際感覚の育成」を、自身の居住しているC市で実現させたいという希望であったと思われる。Bの国際交流活動の原動力は、ヨーロッパの経験から生まれたBの信念と、自身の子供を含むC市市民への期待であると思われる。

3) 地域の国際交流イベントとの関わり

A、Bは共にイベントCの実行委員をし、企画、運営に関わっている。Aはインタビュー時に実行委員長をしており、Bはインタビューを行った翌月、年度が替わった時点で新実行委員長に就任した。

AはイベントCが、地域の国際交流団体の活動発表の場となり、また、国際交流活動に参加していない人々に対して国際交流団体の存在をアピールできる重要な場であると自覚しつつも、「団体の責任者としての受動的な実行委員就任からくる義務感」の方を強く感じている。その背景には、「同じ目線で関わりたい気持ちと国際交流の当事者の立場への回帰願望」があるようだ。しかし、その中で、イベントCを利用し、国際交流活動に興味を持つ若者を中心に自身の所属する国際交流団体のアピールも怠っていない。

Bは、現在のイベントCに「実行委員主体になったことによる増加した負担」を感じており、以前の「市主体の活動形態」を望んでいる。BはイベントCの実行委員をすることで、他の国際交流団体の内情を知り、国際交流団体の高齢化という問題を指摘している。

両者とも、イベントCについて、その存在意義を認めているものの、実行委員として活動することに対しては、義務感、負担感を感じているようだ。ただし、AはイベントCを国際交流活動を広める場と考えて行動し、BはC市全体の国際交流団体をまとめようと努力しているという態度の違いがみられる。

表7 Aのインタビュー・テキスト②

あの一、話せるようになってからホームステイを受け入れするんじゃなくて、本当に全然喋れん言葉の人でも、なんか受けてみたり、でも、ま、一応挨拶ぐらいは、あの、その当時はまだ CD じゃなくてテープの時代だったんですけど、テープのこの辺にあるよみたいのを聞いて、なんか一言言ったらやっぱり何かね、なんか目がキラキラとなって、顔がフニャフニャとなって、「わあ」と思ってなんか一言言っただけで、「なぜ喋れるんですか」みたいな質問を多分されているんだろうなっていう、(略) 色んな使えそうもない言葉と思っただけでなんか使える言葉なのかなっていうのがあって、で、なんかね、やっぱりこの活動は続けて行こうかな、ライフワークだなって思ってます。

5. 2. 国際交流活動への示唆

小島他(2015)⁸⁾は、「内向き志向」と「外向き志向」の大学生、それぞれの国際交流に対する意識を比較した。その結果、両者の知識や経験に差がないにもかかわらず、「内向き志向」の学生は、留学生との文化の違いや留学生と関わることで自体に不安を感じるとともに、自身の外国語力の不足を感じていることが分かった。小島らは、国際交流活動において、「内向き」な学生に対して不安を和らげる対策を取るべきだと指摘している。しかし、今回の調査で、言葉ができなければ通じ合えないという思い込みに起因する外国人への畏怖を感じている者でも、交流には言語が必須という思い込みを壊す体験が国際交流に一步踏み出すきっかけになり得ることが分かった。国際交流活動の方法、外国語能力の不足から国際交流を躊躇している者を呼び込む方法として、大きく言葉に頼らない交流の形式、例えば、参加者同士で同じ体験をするなどの何らかの方法を考える必要があると考える。

また、現在の異文化理解教育が知識偏重となっている場合が多く、「行動」や行動を起こすための「感情」に結び付くような異文化理解教育が必要であるという指摘⁵⁾にも、今回の調査結果は重要な示唆を与えている。Bが言う「実体験から見識を広めるという方法」は有効であり、「友好関係を築くことの重要性への認識をもたらす」可能性があるのである。国際交流において、単なる知識の紹介で終わらない、体験による学びが、参加者の感情面に影響を及ぼす可能性がある。

大きな国際交流イベントの企画や運営を行う実行委員を地域住民が担当した場合、それが負担となったり、義務感で引き受けることになったりと、自発的に始めた国際交流活動との関わり方がゆがめられてしまう可能性もある。役割分担には十分な配慮が必要であると言える。

地域の国際交流イベントには、その地域に存在する国際交流団体が参加することが多い。AはイベントC

において、積極的に自身の団体の活動を宣伝し、訪れた人々に体験型のアクティビティを提供することで、団体の活動や海外に対して興味を持たせることに成功していた。イベントCは、いわゆる3Fと呼ばれる活動を行う、お祭りのようなモノで、多くの参加者を集めることができる。Aの団体のようにうまくその場を利用できれば、イベントCの参加者を日常的な国際交流活動にいざなえる可能性がある。また、参加者を日常的な国際交流活動に誘導することで、Bの懸念する国際交流団体の高齢化問題の解消に繋がる可能性もある。

6. まとめ

本研究は、国際交流活動を長年続けている地域住民を調査対象とし、①国際交流活動に踏み出すことになったきっかけ、②国際交流活動の継続を促す要因、③地域の国際交流イベントとの関わりについてインタビュー調査を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

- ①国際交流活動に踏み出すきっかけとなり得るものは、異文化を持つ者との実際の出会いである。
 - ・異文化を持つ相手に対し、畏怖の感情を持っている者でも、自身の子供など自分にとって身近な存在を介した出会いによって畏怖や不安が打ち消される。
 - ・異文化を持つ者からの拒絶や拒絶された中で受けた親切を実際に経験することが、異文化に目を向けるきっかけとなる。
- ②国際交流活動を継続させるものは、自身の喜びや満足感であるとともに、自身の周囲の人物、特に自身の子供に対して自身と同じ体験をしてほしいという期待である。
- ③地域の国際交流イベントにおいては、実行委員など、まとめ役を担う地域住民の負担増が原因で、地域住民の自発的な活動が阻害される場合がある。

以上のように、国際交流活動に踏み出し、国際交流活動を継続する要因には、異文化を持つ者との出会い

とともに自分の身近な存在，特に自身の子供の存在が大きいようだ。国際交流においては，子供とともに，または家族や近い人と参加できるように参加形態を工夫することで，国際交流が一過性のもので終わることなく，また，高齢化に悩む国際交流団体の新陳代謝に繋がるのではないだろうか。

また，地域の国際交流イベントでは，まとめ役を担う地域住民の負担が大きくなる場合がある。まとめ役となる地域住民は，その地域の国際交流の核となっている可能性が高い。そういった地域住民の自発的な活動が阻害されないよう，担当自治体による配慮が必要である。

7. 今後の課題

今回，2名のインタビューから，いくつかの新しい国際交流活動への枠組み構築への示唆を得た。しかし，今回，明らかになった点は，あくまでも事例に過ぎず，一般化できるわけではない。今後も調査を継続し，事例の蓄積を行うことが必要である。

注

- 1) 総務省HP>政策>地方行財政>地域力の創造・地方の再生>地域の国際化>多文化共生推進「地域における多文化共生プランの改正について」000718717.pdf (soumu.go.jp) (2021.11.22)
- 2) 法務省HP>入管政策・統計>外国人との共生施策>外国人人材の受け入れ・共生のための総合的対応策（過去の資料）平成30年度
<https://www.moj.go.jp/isa/content/930004288.pdf> (2021.11.22)
- 3) 鈴木恵理子 (2009) 「『新たな住民』の到来と地域社会－共に生きる社会に向けて」『国立民俗博物館調査報告』83巻，pp.229-244
- 4) 外務省，神奈川県，国際移住機関 (IOM) 主催「外国人の受け入れと社会統合のための国際ワークショップ」第1分科会 (2010) [foreign_teigen.pdf](https://www.mofa.go.jp/teigen.pdf) (mofa.go.jp) (2021.11.24)
- 5) 古田暁監修 (1996) 『異文化コミュニケーション [改訂版] 新・国際人への条件』有斐閣新書p.257
- 6) 川那部和恵 (2006) 「異文化理解教育における実践的アプローチの可能性」『教育総合実践センター研究紀要』15巻，pp.53-60
- 7) 大谷尚 (2019) 『質的研究の考え方 研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋学出版会

- 8) 小島奈々恵他 (2015) 「日本人大学生の国際交流に関する意識調査－『内向き志向』と国際交流意思の関係－」『総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集』Vol.31，pp.35-42

※本研究はJSPS科研費挑戦的研究（萌芽）JP19K21739「外国人との交流活動が日本人に及ぼす効果を検証する挑戦的研究」（研究代表者：関崎博紀）の成果の一部である。